

ほっとニュース

発行：特定医療法人一成会 木村病院／企画広報室

一
成
会
理
念

みんなの元気のパートナー



荒川区健康診査を受けましょう

特定医療法人社団一成会 理事長・木村病院院長 木村 厚

皆さん、いかがお過ごしですか。



経済情勢が悪くなり、ますます暮らしにくい世の中になってきました。年末には、職を失い住む場所も失った人たちが日比谷公園に集まるなど、「100年に一度の大不況」と言われるような、ただならぬ時代です。こんな時こそ、いたずらに動揺したり、報道にまどわされたりするのではなく、日ごろの生き方や生活習慣を深く見つめ、歴史をひもといたり外国の例に学んだり、将来を見すえ、自分自身のための目標を持つことが大切であると考えます。

一成会では、昨年、「医療機能評価」の更新受審を行なうとともに、ミドルマネジメントの研修を行ないました。医療の充実は、医療機関として最も大切なことですが、現在、私たち医療機関は、「より質の高い医療」とともに、「より効率的な医療」を求められています。マネジメントのレベルアップは、医療の効率化にプラスになるばかりではなく、医療の質を上げるためにも大切です。私たち医療従事者は、もともと、マネジメントはあまり得意ではないのですが、今年は、私が率先してマネジメントのさらなるレベルアップに取り組みたいと考えています。

さて、皆さんも、新聞やテレビなどで「新型インフルエンザ」について、お聞きになったことがあるでしょう。「新型インフルエンザ」の大流行は、近い将来必ず起こると言われています。今号では、その「新型インフルエンザ」について、知っておきたいこと、皆さんの身の回りでもできることを取り上げました。ぜひ、ご参考にして下さい。



一成会は、今年も厳しい中でも将来を見すえ、一歩ずつ着実に前進を続ける所存です。引き続き、皆様のご理解と、ご指導ご鞭撻を、よろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、今年一年の皆様のご健康とご活躍を、お祈り申し上げます。

「新型インフルエンザ」ってなあに？

〇はじめに

近いうちに、「新型インフルエンザ」が世界中で大流行する、と言われています。

これまで、何回か、新型のインフルエンザが世界中で大流行して、人類は大きな被害をこうむってきました。もっとも有名なのが、1918年(大正7年)の新型インフルエンザで、当時は、「スペイン風邪」と呼ばれていました。世界中で、4000~8000万人の死者を出し、日本でも45万人が生命を失ったと言われています。何十年かに一度、人類が経験したことのないウイルスが出現するためにこうしたことが起こるのですが、ワクチンができるまでの期間、私たちは全く無防備な状態になります。

「スペイン風邪」が流行った1918年と現在とでは、世界の状態が、全く違います。ジャンボジェット等の発達で、世界中をたくさんの方が毎日行き来しています。そのため、世界のどこかで発生した新型インフルエンザは、短期間に、各地に飛び火することが心配されています。新型インフルエンザの世界的な大流行は、「起きるかどうかが」問題ではなく、起きることは確実に「いつ起きるか」が問題なのです。

そこで、今号は、正しく理解し、対応して頂くため、「新型インフルエンザ」特集を組みました。

〇新型インフルエンザとは

新型インフルエンザは、これまでなかった新しい病気です。つまり、今は、まだない病気です。インフルエンザは、「ウイルス」というものが原因で起こりますが、「ウイルス」は、突然変異を繰り返しながら、少しずつその性質を変えて行きます。そして、ある時、全く新しいタイプのウイルスになります。人間は、その時点で、その新型ウイルスに対する免疫を誰も持っていないので、爆発的な大流行となり、多くの方が感染し、多くの方が亡くなります。



東南アジアを中心に、「鳥インフルエンザ」というものが見つかっています。これは、鳥がかかるインフルエンザで、本来は鳥と鳥の間で感染するのですが、1997年以降、この中から、人間にもうつった例が、ときどき報告されています。現在は、鳥からうつったインフルエンザが、人間と人間の間で感染したはつきりした例はないのですが、これが、いずれ人間と人間の間で感染するタイプのウイルスに変わるだろうと予測されています。それが、ここで取り上げる、「新型インフルエンザ」と呼ばれる病気です。

○新型インフルエンザが大流行したら

ひとたび人間同士の感染が起こると、それは、1週間くらいの短い期間に、世界的に大流行するだろうと予測されています。下に、スペイン風邪流行時と、現代の、数字で見た大雑把な比較表を掲げます。

新型インフルエンザにより、日本国内でも、17～64万人(政府の予測)、あるいは210万人(オーストラリアのロウイー研究所の試算)の死者が出ると言われています。

	スペイン風邪(1918年)	新型インフルエンザ(?年)
世界の人口	18億人	63億人
交通	蒸気船 + 鉄道	ジェット機 + 自動車
感染拡大方法	4～11ヶ月	1日～1週間
症状	徐々に拡大	同時多発
患者数	3～8(億人)	9～25(億人)
死亡(弱毒)	4000～5000(万人)	2000万～5億人

※ 世界のどこかで感染が始まると、あっという間に全世界へ拡大！
その上、ウィルスは弱毒性→強毒性へと変化している。

インフルエンザの違い			
	季節性インフルエンザ	鳥インフルエンザ	新型インフルエンザ 【まだ、発生していない】
ウィルス	A/H1N1(ソ連)型 A/H3N2(香港)型 B型	A/H5N1型	不明
予防接種	ある	開発されたが効果は不明	なし
感染経路	人→人	鳥→人	人→人
症状	高熱、頭痛、筋肉痛、咳などの全身症状が出るが、死亡率は低い	症状は急激に進行、重症肺炎になり、呼吸不全で60%以上の死亡率	不明
治療方法	治療方法あり(但し、耐性ウィルスあり)	治療が効く症例と効かない症例がある	不明

○新型インフルエンザに感染すると

新型インフルエンザの症状は、鳥インフルエンザのようなものと予想されています。



38度以上の高熱を発し、出血し、多臓器不全(同時に複数の臓器が働かなくなることを引き起こします。肺が感染し、呼吸困難になります。下痢や腸からの出血、腹痛に襲われます。その他、脳炎、心筋炎、鼻血などの症状があります。

通常のインフルエンザとは、激しさが全く違い、致死率は60%にもなります。

また、鳥インフルエンザの特徴として、30代以下の若年層・小児に患者、重症例、死亡例が多い、ということがあります。これは、若年層の免疫機能が高いので、かえって自分の免疫を破壊し、臓器の疾患が重症化(「サイトカインストーム」といいます)するためだと考えられています。ただし、途上国では、若い人の方が鳥インフルエンザに感染した鳥に触れる機会が多かったため、という説もあります。

新型インフルエンザの感染は、患者さんの痰、唾液や鼻水による飛沫感染だけでなく、空気感染の可能性もあると言われています。

○国の対応

日本では、2008年に放送されたNHKの番組をきっかけに与党内に「鳥由来新型インフルエンザ対策に関するプロジェクトチーム」が発足し、厚労省に新型インフルエンザ対策推進室が設立されました。日本の対策は、「早期封じ込め」が中心で、国内に大々的な感染が起きたときの対応策は、まだ十分に明らかになっていません。新型インフルエンザ専門家会議が、基本方針を策定し、それを元にガイドラインの改訂作業が行なわれています。

○荒川区の対応

新型インフルエンザが流行し始めると、荒川区役所は、必要最小限の機能を除き、原則として業務は停止し、新型インフルエンザ対応に当たります。感染を最小限に食い止めるため、学校・幼稚園・保育園等は閉鎖し、区主催の講座やイベントも中止します。

それから、患者と接触した人(「接触者」と呼ぶ)を隔離します。新型インフルエンザでは、症状が出る1日前から周囲の人への感染が始まることから、症状の出た人が1日前に接触した人は、すべて「接触者」になります。

荒川区は、保健所に「新型インフルエンザ相談窓口」を設けます。自分が新型インフルエンザに感染したかも知れない、と思った方は、医療機関に行くのではなく、この「新型インフルエンザ相談窓口」に、電話かFAXでご相談下さい。(新型インフルエンザが発生したときに連絡先は公開されることになっています。)

新型インフルエンザが疑われる患者さんは、病院・診療所ではなく、各区が新たに設置する「発熱外来」で診療します。この時点で、木村病院を含む荒川区内のすべての医療機関は、東京都や荒川区の指示に従った医療体制を取ることになります。

○皆さんの対応

新型インフルエンザへの対応では、早期の対応が大変重要だと言われています。ごく早い段階で思い切った対応ができるかどうかで、感染の範囲が大幅に違い、その違いは、結果として、死亡者数を減らすことにつながります。国や区の早期の対応とともに、皆さんが、基本的なことをよく理解した上で以下のことを実行していただくことが大切です。



1. ニュースに気を配り、新型インフルエンザの流行を察知する
2. 新型インフルエンザの流行が始まったら、外出を控える
3. 外出しないでも家で過ごせるよう、最低2週間分の食料等を備蓄する
4. 外出する際は必ずマスクを着用し、帰宅したら手洗いやうがいをする
5. 感染の不安がある場合は、荒川区の保健所の「新型インフルエンザ相談窓口」に電話等で連絡する(医療機関への受診はしない)

よろしくおねがいたします

外科

藤井昭芳 医師

こんにちは。

2009年1月5日から木村病院に勤務させていただいております。

生まれは渋谷、育ちは高田馬場です。出身大学は院長と同じで同級生です。そんなご縁でこの度、お世話になる事になりました。当院には同窓生が大勢いて、大変に心強く思っています。やっぱり、同窓っていいですね！



というのも、私は大学を卒業してすぐに横須賀米軍海軍病院にインターンとして一年間勤務し、その後、東京女子医科大学第二外科に入局しましたので、母校とは縁が切れてしまったからです。大学では一般外科と乳腺外科をやっていました。長野県の飯山赤十字病院、大分医師会立アルメイダ病院、中野江古田病院、立川中央病院の外科に勤務していました。木村病院は本来の意味での地域密着型病院だと思います。日本人の年齢構成を反映したように元気な高齢の患者さんと相対し、本当の意味での地域医療の一端を担っていけると思っています。カッコいいことを言っていますが、一から少しずつ勉強し直しつつ、今までの経験を生かし頑張りたいと思っています。

モットーは自分に正直で素直であることです。趣味は通勤の行き帰りの読書です。乱読ですが歴史ものが大好きです。体を動かすことも好きで、ウォーキングと週一のゴルフが一生できればと思っています。それには心身とも元気である事ですね。

よろしくおねがいたします。

「病院の言葉」をわかりやすく



国立国語研究所「病院の言葉」委員会が、患者さんにわかりにくい言葉をわかりやすくする工夫を医療者に提案しています。以下にその一部をご紹介します。

患者さん中心の医療をするためには、医療者が説明に使う言葉を患者さんに理解していただかなければなりません。そこで、当院の治療に際して、よく使われる言葉をここでご案内します。

説明する医療者を前に「その言葉の意味がよくわかりません」と言うのは患者さんにとって大変な事だとは思いますが、ご遠慮なく質問していただいて、皆さんが、望んでいらっしゃる事を医療者に伝えていただき、それについて私たちがお答えすることによって、信頼関係を作り、安心して医療を受けていただけたと考えます。

イレウス・・・腸の一部が詰まって、食べ物やガスが通らなくなった状態。

インスリン・・・膵臓で作られ、血糖を低下させるホルモンで薬として糖尿病の治療に用いられるもの。

インフォームドコンセント・・・治療法などについて医師から十分な説明を受け、患者が納得した上で同意する事。

エビデンス・・・病気にかかった人に実際に使って確かめられた、この治療内容がいいという証拠。

介護老人保健施設・・・病状が安定した高齢者が、介護や医療を受ける施設。

ガイドライン・・・病気になった人に対する治療の実績や医学研究に基づいて、国や学会が作った診療の指針。

<次回続く>